

午後五時

午後五時

雲っている

いろんな人の

ため息でできた雲なのだろう

夕方の風に吹かれて

青空が

ちよつと

のぞいた

夜風

かたこと

かたこと

窓うつ夜風

かたこと

かたこと

胸にしみいる

南の夜空

窓の外で

だれかが呼んだような

窓にかけよる

だれもいない

南の夜空はネオンで青く染まっている

月

屋根のうえに
月がひとつのっている
星などは雲に隠れているのに
大きな月だけが
ぽっかり

彼方より

彼方より
舞いでて

ひと時
夜空にきらめき
消えてゆく
わたし

願いをかける
間もなく

こんなものか

ちよつと立ち止まり

考えて

歩きだす

そしてまた

ちよつと立ち止まり

タバコをふかして

空を見上げて

歩きだす

どうしたの

男..君は何を考えている

ぼくらはこれからどうしようとしているんだろう

女..どうしたの

男..ちよつとね

女..コーヒー、飲みにいきましょうか

男..そうだね

...

男..夜の東京、きれいだ

女..そうね

車は雨のように降り
聞から聞へ消える

女..この店にしましょう

•
•
•

女..砂糖は二つね

男..ありがとう、一つでいいよ

影絵

夕陽の浜べ
銀の波間にあなた

うしろから
そっと触れてみた
あなたの影絵に

わたしの指は
ぼろぼろと 崩れて落ちた

あなたは気づかなかつた
ふるえる指の悲しさを

秋

空に

ほんの少し

さびしさが

そよいでいる

道端で遊ぶ子どもたちの歓声が

かわいらしく聞こえるのも

秋のすんだ空気のせいだろう

二十歳

月がでている

淡い光に

まばらになった柿の葉が光っている

こんなふうにな年をとっていくんだな

とつぶやいた

十一月七日

なにか

二十歳はたちになった

立冬の月のきれいな晩であった

冬の夜

吉谷家の犬が ないている
わんわん
などという下品な声ではない

うおおおん
はらわたまでしみわたる
悲しげな声だ

うす靄がかかった冬の夜
うおおおん うおおおん
なんども なんども ないていた